カンカン部隊の
思い出

～母ちゃんの思い～

母のこと

私は山陰海道を「走る魚市場」としての一番列車に乗り込み、毎日行商に励む俗に言うカンカン部隊のおばさんである。母の後を受け継いで二十五年、親子二代を通して百年を達成すべく頑張っている。

私の母は明治十八年生まれで十五歳の時から八十二歳まで、六十七年間、かくしゃくとして行商に小月の町に通い続けたのである。

昔は今のように乗り物があったわけではない。脚半にわらじを履いて川棚の山を越し貴飯から吉賀、そして七見を通り、往復何里という道のりを重い荷を六尺（てんびん）で毎日通ったという。当時の商売仲間は三十人ばかりで、その人たちはみな死んで一人もいないとその当時は嘆いていた。

暗い中から家を出て帰りは七見のあたりから暮れて行ったと聞いた。そうして落ち合うのは

吉賀(よしが)の橋に決めており、久野(くの)、長谷(ながたに)の峠を打ち連れて松谷(まつや)に帰ってきたそうな。イワシがひとばら三銭五厘、小さばが一荷三銭の時代である。

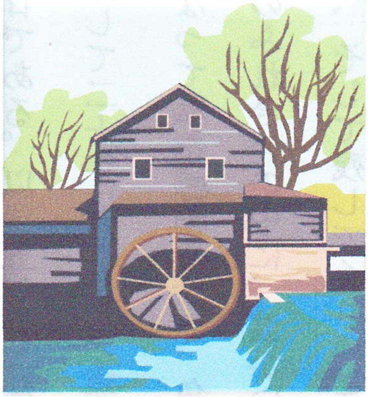
小月の駅が出来たのは母が七十八歳の時、昭和三十七年九月九日、私が母に弟子入りした記念すべき日である。以後五年間、助手として商売を覚えたのである。

母が他界して二十年になる長い歳月を経た今もなお、温厚な母の人柄は時折、小月の人の話題となって私を感動させる。魚商(ぎょしょう)を天職として商売もさることながら、人間関係を大切にし人々とのふれ合いの中に、温かい交流がなんとも楽しい日々である。

母が築き、そして残してくれたこの城をこの人々を大切にして行くことこそ、母がどんなによろこんでくれ、そして最高の回向(えこう)となるのだと、私はしっかり確信し肝(きも)に銘じ、さらに感謝をこめながら日々行商に励んでいる私である。

長い間、絶えて来たつらさを吹きとばすような勢いで、野の花が萌えいずる季節到来、わが人生も自分に負けずかくありたいと痛切に感じる今日このごろ、この稿を書くに当たり、まず

母のことを書かせていただこうと思いました。ありがとうございました。
精出せば凍る間もない水車。私はこの言葉が好きです。



山本ソノ子（豊浦町　主婦）

現在の川棚温泉駅⇔

旧川棚温泉駅

昭和三十年代の駅ホーム⇐

親からもらった手

朝からきれぎれに降り続いた雨が小月（おつき）駅をでるころ、またやって来た。仕事を終えた帰りの列車の中で外の雨は、苦にならずかえって満足感に変わる。朝来る時の緊張感とは別に、ゆとりのある気分になる。

長府から乗って来た中年の奥さんが私の前の席にかけた。膝の上に置いた手が異様に白い。きれいだと思った。細く美しい。商売する時は全く気にならないし、この手が当たり前だと思っている。しかし時として大いに引け目を感じる。

日焼けして茶黒い手、脂気はなくカサカサした手、節くれた不細工な手。奥さんのきれいな手に比べてすごく惨めだった。「良く働いて本当に関心ですネ。商売はもう長いのでしょうネ」と声をかけて来た。「きれいな手ですネ。うらやましいです」。全然こたえになっていない。「私はあなたの方がうらやましい。

自分でお仕事を持っていて、張りがあって活気があって、この手で生活を支えて来て、今まで大変な苦労も多かったでしょう。私はこの手を尊敬します。」と私の気にしている手に奥さんの白い手が来た。やわらかくその感触は赤ちゃんのようだった。「手も優しいけれど奥さんも優しいですね」。私もうちとけて行った。たとえそれが慰めの言葉であってもよい。心に残る厳しい叱責（しっせき）も大事だけど、真心と誠意の一言も大切にしたい。私はそう思った。私の手が日々の仕事を物語ってくれることで、ひそかな誇りを持っている。他人に自分を見せる誇りではなく、自分を整えるための内なる誇りである。どんなにみにくい荒れた手であろうと、親からもらった大切な〃たからもの〃だという心の中に、気構えた誇りである。

山本ソノ子（豊浦町　主婦）

幡生駅ホーム⇔

幡生駅舎⇐

ある朝の一コマ

我々の乗る鮮魚列車が幡生のホームに着くと、徳山行き（改正前）に一人の身体障害者の男の子が、三分の停車時間しかないその列車に乗るため必死であった。いつも日曜日明けには必ず乗って来る。

松葉づえで、階段の所まではすごく早い。だが階段を上がるのにひと苦労する。手を貸してやりたいと思う。だが本人は人の甘えには応じない姿勢を感じる。自力で一生懸命三分の限られた時間に挑戦している。その姿に心打たれる。いつどんな場合でも人の親切は美しい。だがこの人たちにとっては、その当座はしのげても、人生の激流を抜けゆく力とはなり得ないのだ。おはようございますのあいさつもきびきびとして元気よく、少しでも暗さを感じさせないのがとてもさわやか。

ある時若い男の人が、いきなり男の子を抱きこんで、あの階段を駆け上がり、危機一髪山陽

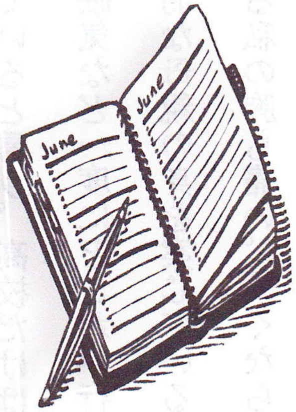
線に乗せた時はジーンと胸にこみあげてくる物を感じて目頭が熱くなったりした。またある日は急いで山陽線に乗ったお客さんが、後から来る男の子のことを車掌に伝えると、車掌さんが階段の所まで迎えに行き、気を配りながら手を貸してようやく列車は発車できた。

この一瞬のほほ笑ましい光景を下りホームから立ち止まってじっと見守っていたお客さんたちの表情にもああよかったとホッとした安どの空気が流れた。どうか強くたくましく明るく生きてネ。心に念じながら重いカンカンを背中に、一歩一歩駅の階段を上がった。

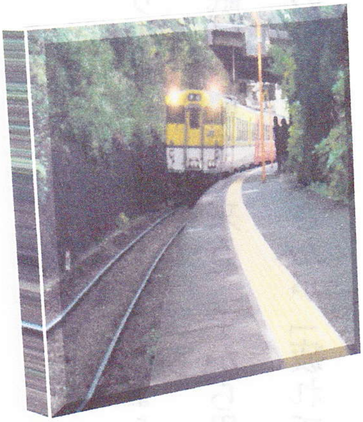
体の不自由な人たちに比べて、こうして毎日元気で働ける。これ以上なんの不足があるというのか。不足だらけの自分に反ばくし、わが身にしっかり言い聞かせながら、そしてまたほのかな暖かい余韻に酔いながら、思いは悲喜こもごも、後の列車に乗った。仲間同士車中での会話はそのことについて話題は尽きなかった。仲間のおばさんたちの目にも光る涙を見た。

身障の人たちの生きるたゆまぬ努力を思い、かえって励まされた思いであった。

行商のかたわら綴（つづ）る歌にして・・・・ノートに魚臭の沁みし箇所あり・・・

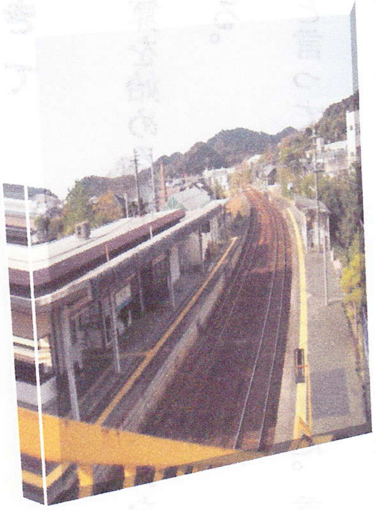


山本ソノ子（豊浦町　主婦）



⇧梅ヶ峠駅ホーム

⇧黒井駅村ホーム



⇧吉見駅ホーム

強く生きて

帰りの列車に乗ると早速きょうのもろもろの計算を始める。手帳を出し、ペンを持つと不思議に眠気が襲って来る。手から思わずペンが落ちる。

隣の席にいた娘さんが「疲れているのですネ」と言ってペンを拾ってくれた。言葉をかけて拾ってくれたことにすごく愛着感を覚え、なぜかすぐ仲良しになっていた。娘さんの心のどこかにある寂しさが人恋しさにつながっていたのかも知れない。家庭の事情で高校を中退し働いていると言う。高校だけは卒業したかったけど今ではあきらめていますと寂しそうに笑った。眠気など一度にどこかへ行ってしまっていた。まだ親に甘え、友達と遊びたい盛りなのに、病弱な母親の身を案じている心が痛ましい。親の苦しみを思い、娘さんの痛みを感じ、聞いている私の胸も痛い。硬くならず娘さんの心の中に入って行った。

「高校をやめる時はつらかったでしょうね。でもあなた以上にお母さんはもっとつらかった

と思う。人知れず大変な苦労があるに違いないけれど、苦しくても決して立ち止まることなく自分に負けず強く頑張ってね」。言葉は足りないかもしれない。しかし私は、心を込めて言った。私は子供っぽく小指を出した。娘さんも心良く小指をからませてくれた。私はうれしかった。手ごたえをいつかむことが出来た喜びは、たとえようもない。こんな時は幡生駅に着くのが早い。無邪気なようでも年に似合わぬ大人っぽさを漂わせて、別れ際におじぎをした。

木枯らしの後に春風がやって来るように悲しみの後に歓びがやって来ることを信じたい。そう念じながら列車を降りた。ホームを歩きながら後から後から涙がほおを流れた。

山本ソノ子（豊浦町　主婦）

新下関駅舎⇒

新幹線ホーム⇐

在来線ホーム⇐

女の子

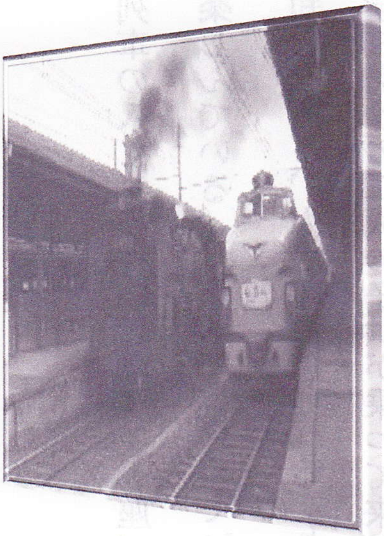
幡生駅に着くのを知らせる車内放送で、浅い眠りから覚める。けだるい体をヨイショと起こして軽くなったカンカンを肩にドアが開くのを待つ。ドアが開いたとたん流れ込むように人が入って来た。乗る人優先の毎日である。降りることも出来ず、立ち往生。さからって無理に降りたらカンカンが当たると迷惑だと思い、じっと立っていた。ホームで待っていた一年生ぐらいの女の子が一瞬乗ろうとした人を右手で制した。そして「おばちゃんどうぞ」と言った。「アリガトウ」。短い言葉に精いっぱいの感謝をこめた。女の子の後ろに母親は、まだまだ若かった。「どうぞ」というように目で私を促した。大人にも出来ないことをあの女の子は勇気を出して実行した。他から強いられた行動ではない。それは平素のいとなみの中で、自分の中に自然と積み重ねて行くものなのであろうと、女の子の親の思いを見た思いであった。毎日外に出る私は、色々なことに接し、色々と教えられ、そして醜い反発心を起こしたりする。まだ降り

る人がいるのに、子供を無理に先に乗せ席を取らせる親もいる。何を考えているのかと腹がたつより悲しい。そしてきょうのようなうれしい親子の出会いもある。喜びも悲しみも、自らの体験がなければ素通りしてしまうものだということも言える。よいにつけ悪いにつけ、そこには一貫して流れる味わい。それはかみしめるほど心の底に染み込んでゆく。発車して通り過ぎる車中、女の子の姿を目でさがしたが見当たらないまま、列車は過ぎて行った。せめて手を振ってサヨナラを言いたかった。

山本ソノ子（豊浦町　主婦）

下関駅東口前

昭和四十八年頃の下関駅ホーム



↑下関駅改札口

↑下関駅西口前

子供の勇気

列車の入り口の長い席に親子が座っていた。女の子は靴をはいたままイスの上でクッションを楽しんでいる。母親は外を眺めている。我々の責める視線を感じたのかチラと横目で見たまま知らぬ振り、人から注意されるより自発的に反省してほしいと願った。綾羅木駅（あやらぎえき）から、ろうあ学校帰りの二人の子供が乗って来た。その顔が怒りの表情に変わった。

子供の心は清純そのもの、我々大人のように雑念が入らない。口をきくことができないから、感情が行動を決める。男の子が母親の背中をつついた。

そして女の子の足を指して靴を脱がすように表現した。母親に対する精いっぱいの抗議だったのだろう。子供のしぐさには素直で嫌みがない。しかし絶対的な説得力があった。ひょうきんで、いつも私たちを笑わせる男の子のどこにあの勇気がひそんでいたのか。あの若い母親は、我が家の畳の上を土足で遊ばせるのだろうか。人の座る所に平気で靴のまま上がらせる母親の

無神経さ。あのかわいい女の子に罪はないにしても非常識極まる精神が許せないと思う。何事もなかったように二人で本などを広げて手まねで話しているのを見て感無量。胸がキュッと締まる思いがした。

口をきくことの出来ない年端もいかないあの子供たちが自分の力で探し、自分の心で見いだしたものこそ真実であり、より大きいのではあるまいか。

これから先の人生航路を挫折することなく自然の波に乗って勇敢にこぎ出して行ってほしいと願った。時間改正後、会うこともない子供たちは相変わらず元気で通学していることだろう。

山本ソノ子（豊浦町　主婦）

⇐綾羅木駅舎

綾羅木駅ホーム⇐

あいさつ

毎日平凡な繰り返しの朝が来た。新緑の日々、若葉の輝きとさわやかな風が心地良い。あじさいの花が目にあざやか。早朝刻々とすべての物が動き出す気配を感じる静寂の中、駅に急ぐ。太陽の光がまぶしい。立ち止まり、大きく深呼吸をして太陽の光と一緒に空気を吸い込む。おいしい。一日の始まりである。すっかり忘れっぽくなったきょうこのごろ、お得意先の注文も、とかく忘れがちになり、よく忘れるといってほめられるのが日課になってしまった。お得意に迷惑をかけることは商法道徳に反する。そこで自分自身を深く反省。しっかりメモを確認したうえでと、心のひもをしめ直すのも朝の日課である。川棚温泉駅から乗り込んだ仲間たちで走る列車は活気づく。目的地に着くと朝のあいさつから始まる。あいさつは人間関係の潤滑油であり、心を込めたあいさつは日々を明るく楽しいものにする。毎朝必ず通って行く小学生とのあいさつ。通勤に急ぐ行き

交うひとたちとのあいさつ。知り人の車はブーを鳴らしてあいさつのサインをして行く。バスの窓から手を振って行く人。楽しい朝のひとこまがその日の励みとなる。そんな最上の装身具である大切なあいさつを明るく快活に交わして生きたいと思っています。

山本ソノ子（豊浦町　主婦）

小月駅前

おばあちゃんの言葉

私が小月で毎朝決まってさかなの荷を置く所に、観音様にお参りにするのを日課にしている、八十八歳のおばあちゃんが寄って行く。昔の人の言うことには、そつがないとよく言う。私もそう思う。昔の人の言葉の中にはなんとも深い深い味わいがある。だから私は好き。おばあちゃんは、けさこう言った。子供というものは、親の言う通りには育たないが親のする通りに育つものだと。私は感受性が強いのか、何によらずすぐ感激する。おばあちゃんとの話の中で、いつも何かを学ぶ。きょうもすばらしい収穫である。「とてもためになることを聞いたから、きょうの魚のもうけなど物の数ではないよ」。私はマジで言った。「こんな年寄りのいうことをそねえに喜んでくれてほんにありがたいナ」とおばあちゃんのえびす顔がほころぶ。その素朴でさりげない言葉の中にひそむものは、今まで長い歳月の中で、新しい一つ一つの体験が物を見る目を深めてくれたものだろう。人のいうことをなるほどそうかとうなずけたら、なにか

そこに小さな花が咲くようである。けさも私の心の中に一輪の、感動の花が咲いた。どんな話でもその聞く人によって異なってくるだろう。人の価値はその人次第だから。私はその日の出来事を、日記に書く。それには喜びがあり、楽しみ、怒り、感動もある。そしてそれは私の歴史ともなる。きょうの日記には、おばあちゃんのことを書くことにした。

山本ソノ子（豊浦町　主婦）

ヤツガシラ
２０１２．4/5に撮影

流れのままに

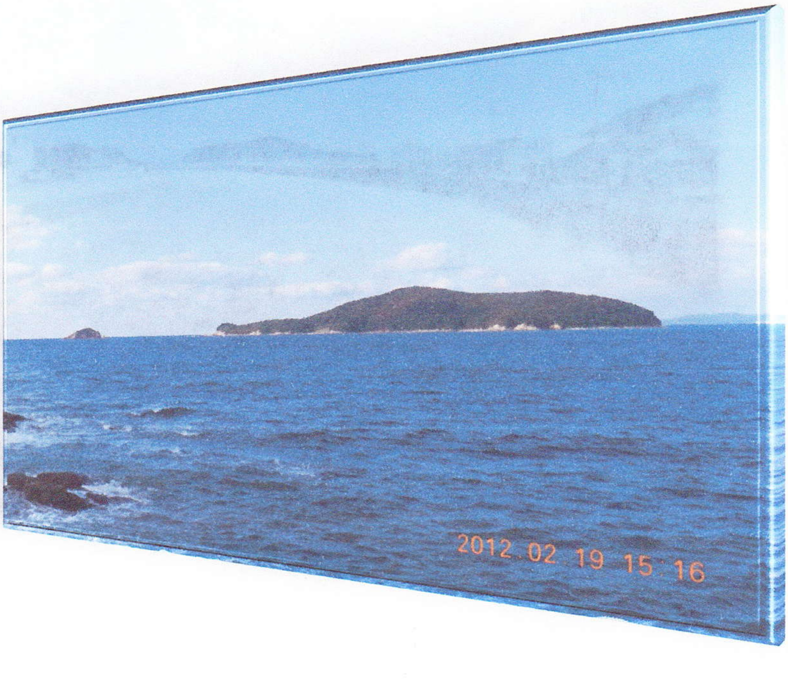
人と人とを強く結びつけるもの、それはお互いの信頼だとおもいます。信頼があれば心が開き、心が開けば一層信頼が深まるし、与えられたらそれを忘れないのも大切だが、与えたらそれを忘れることも大切だと思います。私が日々生活している中で、あるいは商売をしている中に、自然と身についた生活の信条でもあります。この稿もきょうでおわります。わたしは特に人間関係という大切な財産、そして人と人との温かいふれ合いを身近な出来事に託して記してきました。自分自身にも改めてその大切さをかみしめています。良い人間関係も常に維持する努力がなければ疎遠になってゆき、頭も体の機能も使わなければどんどん衰えていくと聞きました。身につけたものは、維持のため手をいれなければ腐化してしまうものらしい。心身共に老化しつつある私にとっては東流西流のメンバーの一員として参加できたことは色々な意味で大変な勉強となり、頭の体操に役立ったことを感謝します。年だからとあきらめず、何によ

らず挑戦してゆく気力を強くし、努力を忘れずに前進して行きたいと心を新たにした五十九歳の初夏の決意です。毎日通っている道なのに、色々な人生模様が展開します。無理にさかわらず低い所へ水が流れてゆくような自然さで生きて行くことも教えられました。私のような未熟者に書く機会を頂き、また読んで下さったみな様に心からお礼申し上げ、終わります。ありがとうございました。

山本ソノ子（豊浦町　主婦）

小串漁港

松谷漁港より撮影



川棚川河口より撮影